

大学生における愛情と好意の性差 －男性は草食化しているのか？

野村 知里

(有馬 淑子ゼミ)

近年、男性は草食化していると言われている。実際にはどうなのであろうか。女性の社会進出がめざましい今日、結婚しないという女性は多くなりつつある。女性が必ずしも家庭をもつという時代は古いといえよう。さらに、eメール以上に手軽にメッセージを送ることができるLINEが普及したこともあり、男女関わらず今まで以上に相手に感情を表しやすく、伝えやすくなった。男性に対して草食系男子、女性に対して肉食系女子という呼び名を聞くこともあり、15年前に一般的にイメージされてきた男女のありかたと現在は変わってきているだろう。

本研究は、15年前のデータ、すなわち2001年と、現在、2016年のデータを比較して、実際に草食化と呼ばれる現象に進行したのかを検討する。第1に、男性と女性の愛情得点は15年前に比べて低下しているのかどうかについて、第2に、男性と女性がそれぞれ、愛情と好意をどのように区別しているのか、区別の仕方に性差があるのかについて、検討する。

恋愛の理論

恋愛は、いつの世でも人々の関心の中心となってきた重要なテーマの1つである。恋愛や愛情を対象とした研究は数多く多岐にわたっており、研究者の視点によりその内容、構造の捉えられ方は様々である。その先駆的なものにはMaslow (1962) のD-love (欠乏や渴望からくる愛) とB-love (愛する他者に自らを捧げることのできる者に開かれる成長の愛) の分類が挙げられる。その後、対人魅力の質的な差に注目し、「恋愛」と「好意」を異なるものとして捉えたRubin (1970) の研究、さらには、恋愛を5つの形(ロマンティック依存性、親密さの伝達、身体的覚醒、尊敬、ロマンティック一体感)に分類したCritelli, Myers, & Loos (1986) の研究や、「親密性」「情熱」「コミットメント」という3要素の組み合わせから恋愛が

8つの形で表されるとするSternberg(1986)の「恋愛の三角理論」などが提唱されてきた。

恋愛・対人魅力における性差

恋愛観の性差を知ることは、対人関係において重要な位置を占める異性間のコミュニケーションを円滑にする上で意義がある。対人魅力(interpersonal attraction)と呼ばれる、他者から好意を持たれやすい特徴を研究する分野では、性差が示されている。例えば、豊田(2000)は、「女性から好かれる男性」、「女性から好かれる女性」、「男性から好かれる男性」及び「男性から好かれる女性」の特徴を自由記述によって検討した。その結果、同性から好かれる特徴と、異性から好かれる特徴に性差のあることが明らかにされている。また、豊田(1998)では嫌われる特徴に関して同じような性差を見いだしている。さらに、堀毛(1994)は恋愛スキル、松井(1990)は恋愛の深まりと熱愛感情、深澤・篠崎・越川(1992)では嫉妬に対する対処行動において性差を見いだしている。このように、対人魅力をはじめとする対人認知研究において多くの性差が明らかにされている。

恋愛尺度

恋愛観の性差や時代による変化を検討するためには、共通尺度が必要となる。恋愛尺度として代表的なものが、ルービンが開発した恋愛尺度である。Rubin(1970)は、相手に対するロマンティックな愛情(romantic love)と単なる好意(liking)を区別した尺度を作成し、親しくつきあっている男女のカップルを調査対象として「恋人」及び「同性の友人」に対する感情を検討している。以降、本研究ではこのルービンの尺度による得点を本論では愛情得点・好意得点と呼ぶ。本研究では、15年前と現在の愛情・好意得点を比較する。

ルービンは、「恋人」に対する恋愛尺度得点(愛情尺度に含まれる項目に対する評定点の合計)と

好意尺度得点（好意尺度に含まれる項目に対する評定点の合計）の相関係数が女性よりも男性が高いという性差が示している。ルービンの結果は、女性が男性よりも愛情と好意を区別する傾向があることを示すものとして解釈されており、「両性の明確な専門分化」という用語で説明されている。

なぜ両性には専門分化が行われるのだろうか。進化心理学的観点ではパートナーの選択にあたり、パートナーを選択するのは男性ではなく、女性だと言われている。男性にとって子孫を残す上で最もシンプルで効率的なやり方は相手を選ばずに性的な関係を取り結ぶ「ばらまき戦略」である。長い妊娠期間を考えれば、一途に一人の女性と共にするよりも、多数の女性と関係を持ち、より多くの子孫を効率的に後世に残すやりの方が適応上合理的である。一方、女性にとっては、信頼に足る男性をパートナーとして選択することが極めて重要である。自分が産んだ子を生殖可能な年齢まで育てることを考えれば、子育てに協力し、豊富な資源（金銭や社会的地位、直接的には食物や住居）を提供できる優秀な男性をパートナーとして選択することが必要になるからである。子を宿した途端にパートナーを見捨てるような男性を選択することは、自分が産んだ子の将来に重大な影響を与えるだろう。また、産んだ子どもを一人で育てなければならぬとしたら、次の生殖機会のための時間を確保することが難しくなる。そのため男性よりも女性の方が、恋人と友人との区別をするのだろう。ただし、Rubin (1970) の尺度の日本版を用いた研究（藤原・黒川・秋月，1983）では上述のような性差は見いだされていない。この不一致は原版と日本版の尺度の構成や被調査者数の違い等の方法論的な要因に帰因すると考察されている。本研究では、ルービンの尺度の因子構造を再分析した後に尺度間の相関を調べて女性のほうが男性よりも愛情と好意を区別するとするルービンの仮説を再検討する。

恋人と異性の友人に対する感情の違い

豊田 弘司，藤田 正（2001）は性差をよりわかりやすくするために「恋人」に対する感情だけでなく、「同性の友人」「異性の友人」に対する感情を加え検討している。「異性の友人」は「恋人」と「同性の友人」の中間に位置する立場であり、

これと「恋人」もしくは「同性の友人」に対する感情の類似性を調べることによって、性差がより明確になるとされる。その結果、女性は男性よりも「同性の友人」に対して高い愛情得点を示す結果が得られた。特に、愛情尺度における信頼について、女性の方が男性よりも同性の友人を信頼する傾向が見られた。これは Rubin (1970) 及び藤原ら (1983) の結果と一致するものである。藤原ら (1983) によれば、この結果は男性と女性の友人関係に関する文化的ステレオタイプに一致している。つまり、他者に対して「愛している」と発言することは男性よりも女性の方が発言した方が受け入れやすいからである。

好意得点については「異性の友人」では性差はなかったが、「恋人」及び「同性の友人」に関しては性差が見られた。どちらにおいても男性に比べ女性の好意得点が高かった。この結果もまた Rubin (1970) 及び藤原 (1983) の結果と一致するものであった。藤原ら (1983) はこの結果に対して、女性が好意尺度の中でも課題遂行に関連した次元（例えば知性や判断の良さなど）において「恋人」に高い評価をしたためと考察している。しかし、Rubin (1970) と藤原ら (1983) では「同性の友人」に対する好意得点に性差はなかったが、豊田 弘司，藤田 正 (2001) では性差が見られており、結果は一貫していない。藤原ら (1983) は好意得点に性差がなかったことの解釈として、女性は男性よりも一般的に好意を表わさず、付き合い合っただけで好意を表わすと考察した上で、時代の変化とともに、女性は付き合い合っているかに関わらず好意を表に出す傾向が強くなったのではないかと結論づけている。

豊田・藤田 (2001) は、上述のルービンの仮説について、異なる対象に対する愛情・好意得点の相関から分析を行っている。その結果によれば、「恋人」と「異性の友人」に対する好意得点の相関は男性よりも女性が低くなっており、逆に「異性の友人」と「同性の友人」間の相関は女性よりも男性が高くなっていった。これは、女性が男性よりも愛情と好意を区別する傾向が強く、「恋人」に対する感情と「異性の友人」に対する感情を区別するのに対して、一方で男性はこの両者に対する感情が女性よりも区別できていないのだと推測

大学生における愛情と好意の性差 — 男性は草食化しているのか？

できる。この結果は、Rubin (1970) の仮説を支持するものだろう。本研究ではこの分析方法を踏襲して、15年前の相関と現在の相関を比較する。

本研究の仮説

本研究の目的は、第1に、男女の愛情得点・好意得点の性差を検討することである。これまで性差がある・あるはないとする結果が得られており一貫していない。これについて、ルービンの尺度を再検討することにより、どのような相手に対するどのような要因に性差が見られるのかについて検討する。さらに、好意得点と愛情得点の15年の変化を検討する。そのために、豊田 弘司、藤田 正 (2001) をもとに「恋人」と「異性の友人」を対象に15年経過した現在も同じ結果が見出されるかを検討する。仮説としては、15年前よりも男性の愛情得点は低くなっていると予想される。

第2の目的は、ルービンの仮説、すなわち、女性に比べて男性は恋人と異性の友人を区別しないとする仮説を検討することである。愛情・好意尺度において、「恋人」に対する得点と「異性の友人」に対する得点間の相関が、女性よりも男性の方が高く見いだされれば仮説が支持されることになる。これについても、豊田・藤田らが得た2001年と本研究が実施された2016年のデータを比較する。15年前に得られたデータの平均・分散・相関のデータを用いて、愛情・好意得点の平均、および恋人と異性の友人に対する得点の相関がどの程度変化したかを検討する。

方 法

調査対象

大学生168名(男性, 104名, 女性, 51名, 平均年齢: 19.821歳, 年齢範囲: 18~25歳)に質問紙調査により回答を求めた。そのうち記入漏れと二重解答があった13名を除く155名とした。

質問紙

恋愛尺度には、Rubin (1970) により作成された項目を大瀧 (1991) が邦訳した項目を用いた。これらの項目は、好意尺度13項目、愛情尺度13項目からなる。これは、藤原ら (1983) が作成した項目とは多少表現が異なっている項目がある。

恋愛尺度は、〇〇さんがいないと寂しい、何でもしてあげたいなど、好意尺度は、〇〇さんは知的な人だと思う、信頼できる、などの項目からなる。回答形式は1(全くそう思わない)~7(非常にそう思う)の7段階尺度である。資料に調査項目を添付する。

質問1では「今までで最も好きになった人」を一人思い浮かべて、その人の名前をRubin尺度それぞれの質問文にあてはめて回答させるのに対して、質問2として、同じ項目に対して「最も親しい異性友人」を一人思い浮かべ、質問1と同様にその人の名前を質問文にあてはめ回答させた。質問1と質問2では別の人物を思い浮かべるように教示されている。

さらに、恋人の有無、恋人、異性友人、同性友人、家族、そのほかに分類しそれぞれ特別な日に誰と過ごしたいかなどの定性的質問項目と「あなたが相手を好きと気づく瞬間はいつですか」という自由記述項目が設けられた。

結 果

記述統計

今回の調査対象者がどのような属性を持っていたかについて、定性的質問項目から報告する。

調査参加者中、恋人がいるのは53名(男性31名, 女性22名)、恋人がいない人は112名(男性79名, 女性33名)であった。

以下の表は現在恋人がいる人を対象にした質問の結果である。現在つきあっている恋人と結婚するかどうかはわからないが、いずれは結婚したいと考えている人の比率が高い。少数ではあるが、恋人がいるにもかかわらず、人を好きになったことはないとする回答も見られる。

Q I あなたは人を好きになったことはありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	28	3	31
	女性	21	1	22
合計		49	4	53

Q II 今後、現在の恋人とは別の人と付き合う可能性はありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	10	21	31
	女性	10	12	22
合計		20	33	53

Q III 今後、現在の恋人とは別の人と付き合いたいと思いますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	2	29	31
	女性	4	18	22
合計		6	47	53

Q IV 今後、あなたは結婚する可能性はありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	23	7	30
	女性	19	3	22
合計		42	10	52

Q V 今後、あなたは結婚したいと思いますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	25	5	30
	女性	20	2	22
合計		45	7	52

Q VI 自分にとってもっとも大切な友人と恋人との時間はどちらを優先しますか？

		恋人	友人	合計
性別	男性	24	6	30
	女性	18	4	22
合計		42	10	52

Q VII 自分の誕生日をもっとも祝ってほしいのは誰ですか？

		恋人	同性友人	家族	そのほか	合計
性別	男性	26	4	0	1	31
	女性	13	4	4	1	22
合計		39	8	4	2	53

Q VIII 年越し（カウントダウン）を一緒にむかえたいのは誰ですか？

		恋人	異性友人	同性友人	家族	合計
性別	男性	19	1	2	9	31
	女性	13	0	4	5	22
合計		32	1	6	14	53

Q IX 旅行に一緒に行きたいのは誰ですか？

		恋人	同性友人	そのほか	合計
性別	男性	23	7	7	31
	女性	14	8	8	22
合計		37	15	1	53

大学生における愛情と好意の性差 - 男性は草食化しているのか？

以下の表は恋人がいない人を対象におこなった質問の解答である。

Q I あなたは人を好きになったことはありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	66	13	79
	女性	31	2	33
合計		97	15	112

Q II 今後、あなたは付き合う可能性はありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	66	13	79
	女性	31	2	33
合計		97	15	112

Q III 今後、あなたは付き合いたいと思いますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	47	32	79
	女性	24	9	33
合計		71	41	112

Q IV 今後、あなたは結婚する可能性はありますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	35	44	79
	女性	22	11	33
合計		57	55	112

Q V 今後、あなたは結婚したいと思いますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	45	34	79
	女性	19	14	33
合計		64	48	112

Q VI 自分にとってもっとも大切な友人と恋人との時間はどちらを優先しますか？

		はい	いいえ	合計
性別	男性	66	13	79
	女性	31	2	33
合計		97	15	112

Q VII 自分の誕生日をもっとも祝ってほしいのは誰ですか？

		恋人	異性友人	同性友人	家族	そのほか	合計
性別	男性	24	3	24	16	12	79
	女性	10	1	8	12	2	33
合計		34	4	32	28	14	112

Q VIII 年越し(カウントダウン)を一緒にむかえたいのは誰ですか？

		恋人	異性友人	同性友人	家族	そのほか	合計
性別	男性	22	1	23	20	13	79
	女性	6	2	6	18	1	33
合計		28	3	29	38	14	112

Q IX 旅行に一緒に行きたいのは誰ですか？

		恋人	異性友人	同性友人	家族	そのほか	合計
性別	男性	15	2	34	14	14	79
	女性	7	0	18	5	3	33
合計		22	2	52	19	16	112

恋愛尺度の因子分析結果

「恋人」に対する最尤法・プロマックス回転の因子分析の結果3因子が析出された。開店後の因子構造表を表1に示す。第1因子の寄与率は39.78%、第2因子は9.98%、第3因子は5.18%であった。第1因子は独占欲、第2因子は相手につくす、第3因子は尊敬と信頼の因子と解釈された。「異性の友人」に対する最尤法・プロマックス回転による因子分析の結果、3因子が析出された。回転後の因子構造表を表2に示す。第1因子の寄与率は40.82%、第2因子は13.1%、第3因子は4.91%であった。第1因子は独占欲、第2因子は尊敬と信頼、第3因子は相手につくす因子と解釈された。第3因子の相手につくすは、「恋人」の第2因子に相当するものとなる。「恋人」と「異性の友人」に対する共通尺度を作るため、各因子から.40以上の共通項目を選定した。結果として、独占欲(項目Q6, Q9, Q10, Q13, Q17, Q19, Q20, Q22, Q23の計9項目の合計点)、尊敬と信頼(項目Q1, Q2,

Q4, Q5, Q8, Q12, Q15, Q16, Q26の計9項目の合計点)、相手に尽くす(項目Q3, Q7, Q11, Q14, Q18, Q21, Q24, Q25の計8項目の合計点)の3つの尺度にまとめられた。独占欲は元のルービン尺度における愛情尺度から成り立っており、「相手に尽くす」は好意尺度から成り立っている。「尊敬と信頼」は愛情尺度と好意尺度の両方が関わる因子となっている。これら3つの尺度得点を分散分析に用いる場合は、恋愛類型要因(3水準)と呼ぶものとする。さらに、質問1「恋人」に対する得点と質問2「異性の友人」に対する得点の違いを検討する場合は、これを関係性の要因と呼ぶものとする。

恋愛感情の性差

上記因子分析により得られた尺度得点に対して、関係性2水準(恋人, 異性の友人) × 恋愛類型3水準(独占欲, 尊敬と信頼, 相手につくす) × 性別2水準(男性, 女性)の分

表1. 恋人に対する愛情尺度と好意尺度の因子構造表

	構造行列				
	因子	1	2	3	4
Q1	.538	.550	.356	.523	-.003
Q2	.425	.426	.284	.701	.166
Q3	.094	.316	.494	.425	.139
Q4	.609	.779	.423	.578	.016
Q5	.327	.617	.492	.457	.043
Q6	.819	.601	.286	.377	.253
Q7	.293	.588	.639	.433	.504
Q8	.538	.752	.394	.429	.231
Q9	.572	.636	.307	.261	.070
Q10	.576	.505	.366	.443	.040
Q11	.360	.465	.629	.498	.234
Q12	.493	.610	.291	.259	.123
Q13	.708	.786	.434	.348	-.039
Q14	.271	.537	.601	.418	-.200
Q15	.382	.584	.385	.299	.095
Q16	.541	.722	.498	.460	.313
Q17	.787	.602	.286	.329	.151
Q18	.225	.382	.789	.272	.148
Q19	.881	.605	.376	.470	.080
Q20	.657	.690	.433	.465	.266
Q21	.371	.319	.557	.542	.491
Q22	.453	.242	.150	.350	.003
Q23	.832	.605	.327	.347	.326
Q24	.304	.402	.836	.384	-.001
Q25	.167	.431	.651	.208	.204
Q26	.431	.570	.557	.511	.244
因子抽出法: 最尤法					
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法					

表2. 異性の友人に対する愛情尺度と好意尺度の因子構造表

	構造行列				
	因子	1	2	3	4
q1	.464	.397	.600	.269	-.003
q2	.536	.256	.668	.221	.166
q3	.230	.649	.444	.028	.139
q4	.739	.398	.780	.236	.016
q5	.315	.815	.511	.229	.043
q6	.841	.232	.495	.323	.253
q7	.385	.617	.524	.358	.504
q8	.593	.394	.674	.291	.231
q9	.780	.265	.587	.032	.070
q10	.679	.223	.489	.371	.040
q11	.427	.648	.566	.270	.234
q12	.362	.432	.486	.519	.123
q13	.762	.312	.665	.242	-.039
q14	.247	.744	.421	.288	-.200
q15	.264	.421	.552	.239	.095
q16	.541	.587	.713	.468	.313
q17	.844	.280	.452	.330	.151
q18	.114	.759	.254	.306	.148
q19	.913	.281	.433	.345	.080
q20	.586	.493	.527	.410	.266
q21	.251	.601	.239	.446	.491
q22	.487	.150	.384	.123	.003
q23	.851	.329	.497	.352	.326
q24	.291	.844	.360	.350	-.001
q25	.252	.818	.427	.201	.204
q26	.537	.381	.569	.712	.244
因子抽出法: 最尤法					
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法					

散分析を行った。その結果、関係性要因の主効果 $f(1,155)=74.35, p<.001$ 、恋愛類型の主効果 $f(2,310)=90.17, p<.001$ 、関係性と性別の交互効果 $f(1,155)=8.60, p=.004$ 、関係性×恋愛類型の交互効果 $f(2,310)=55.17, p<.001$ が有意であった。恋愛類型と性別の交互効果 $f(2,310)=0.79, p=.459$ は有意ではなかった。関係性×恋愛類型×性別の3要因交互効果については、 $f(2,310)=2.82, p<.061$ であり有意ではないものの、傾向差がみられた。

性差については $f(1,155)=1.507, p<.221$ で有意性は見られなかった。

男性の結果を図1に、女性の結果を図2に示す。

分散分析上効果が見いだされた交互効果は、性別と関係性の間である。女性の方が男性よりも友人よりも恋人に対する得点を高くつける結果となった。有意な傾向が見られた3要因交互効果は以下のようなものである。図1・2に示されているように、愛情尺度得点から成り立つ独占欲において恋人と友人の差が大きくあらわれており、この差は男性よりも女性で大きい。また、好意尺度得点から成り立つ「相手に尽くす」因子や愛情と好意尺度得点の両方から成り立つ「尊敬と信頼」因子については、恋人と異性友人の差が小さく、男性と女性の性差も小さい。これらの結果は、全体としては性差が見られないものの、恋人と異性友人に対する独占欲について性差が見られることを示唆している。

15年前との比較

豊田 弘司, 藤田 正 (2001) の先行研究と比較を行う。過去の研究に改めて因子分析はできないため、ここでは元の尺度の愛情尺度13項目と好意尺度13項目の合計点をそのまま用いる。ただし、本研究では7段階リカード尺度を用いたが豊田 弘司, 藤田 正 (2001) では9段階リカード尺度を使用していたため、豊田らのデータの平均値の7/9と本研究の平均値を比較する。

15年前と現在の平均値を比較するために母分散の異なる場合のT検定を行ったところ。恋人に対する男性愛情得点は $t(103,197)=3.921, p=0.003$ 、であり1%の有意水準で平均の差が見られた。15年前に比べ男性の恋人に対する愛情は減少している。異性の友人に対する男性の愛情得点は、 $t(103,197)=0.133, p=0.316$ で平均の差は有意ではない。恋人に対する男性の好意得点は、 $t(103,197)=1.411, p=0.157$ で平均の差は有意ではない。異性の友人に対する男性の好意得点は $t(103,197)=1.456, p=0.025$ で5%の有意水準で平均の差が見られた。好意得点についても、男性は過去に比べて低下している。一方で女性は、恋人に対する恋愛得点は $t(159,50)=1.061, p=0.829$ で検定結果、異性友人に対する恋愛得点は $t(159,50)=1.324, p=0.250$ 、女性の恋人に対する好意得点は $t(159,50)=1.198, p=0.464$ 、異性友人に対する好意得点は $t(159,50)=1.206, p=0.385$ となり、いずれも平均値の差は有意ではなかった。愛情得点に関する2001年の結果を図3、本研究の結果を図4

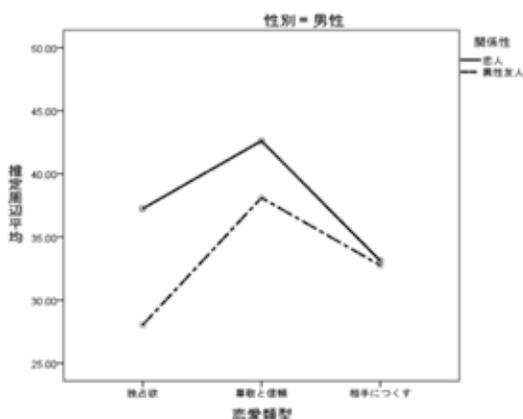


図1 恋人・異性友人に対する男性の恋愛感情

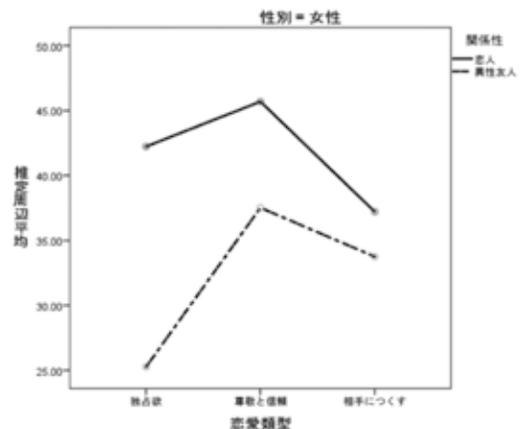


図2 恋人・異性友人に対する女性の恋愛感情

に示す。好意得点に関する 2001 年の結果を図 5、本研究の結果を図 6 に示す。

愛情得点において、恋人と異性友人の差が開く関係については、15 年前と同じであるが、恋人に対する男性の愛情得点、異性友人に対する男性の好意得点が低下した結果となった。女性は変化していない。

恋人・異性友人に対する好意・愛情得点間の相関

男女の愛情得点・好意得点それぞれについて、「恋人」と「異性の友人」の間の相関係数を求めた。15 年前の結果を表 1 に、現在の結果を表 4 に示す。15 年前との相関係数の差の検定を行ったところ、15 年前の相関値と有意な差は見いだされなかつ

た。

次に、相関係数に男女差が見いだされるか相関の差の検定を行ったところ、好意得点に関しては、現在 $z=-0.344582$ 、 $p=1.2695917$ も 15 年前 $z=0.99$ 、 $p=0.32$ も、恋人—異性—友人間相関に男女差は見いだされなかった。愛情得点については、15 年前の相関は男性 .31、女性 .08 であり、性差は 5% 水準で有意であった ($z=2.24$ 、 $p=0.02$)。現在の相関は、男性 .28、女性 .18 であり、 $z=2.01$ 、 $p=0.045$ でこちらも男女の間に 5% 水準で有意な相関の差が見いだされた。まとめると、好意得点に関しては恋人に対する得点と異性友人に対する得点間相関係数は男女で差はない。一方で、愛情得点に関しては、15 年前も現在も相関係数に性差

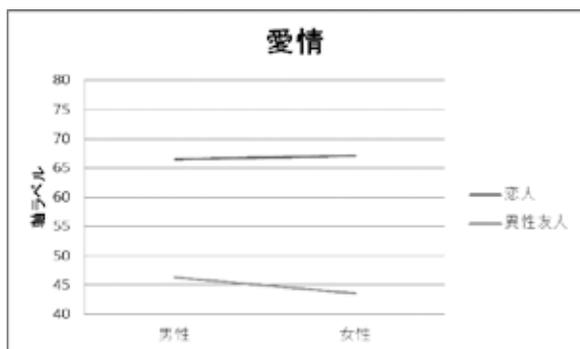


図 3 2001 年における恋人・異性友人に対する愛情得点 (豊田・藤田) 2001 より作図

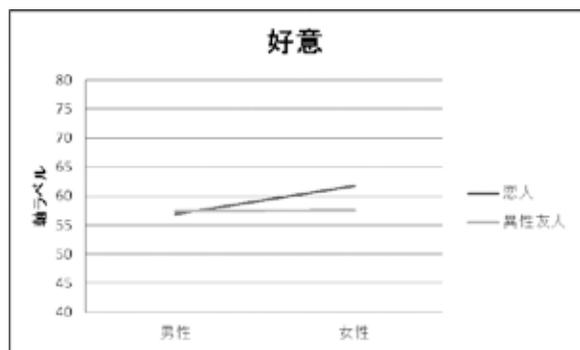


図 5 2001 年における恋人・異性友人に対する好意得点 (豊田・藤田) 2001 より作図

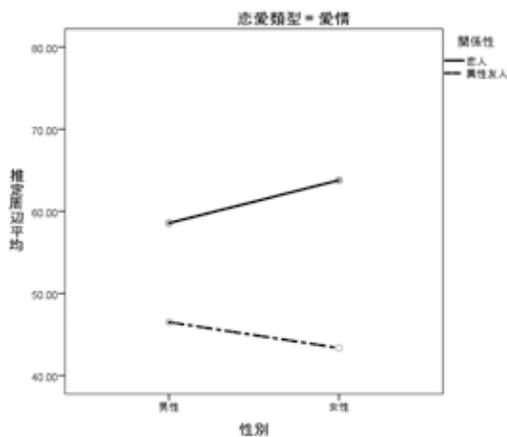


図 4 2016 年における恋人・異性友人に対する愛情得点

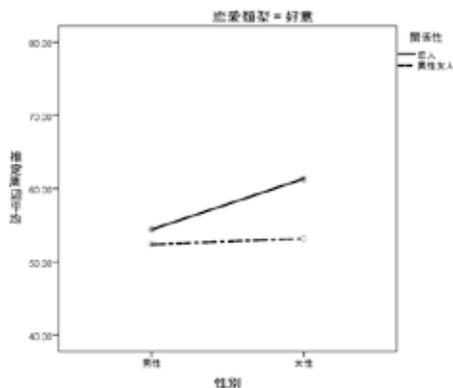


図 6 2016 年における恋人・異性友人に対する好意得点

大学生における愛情と好意の性差 — 男性は草食化しているのか？

が見られる。男性よりも女性の方が恋人と異性友人を区別して愛情を感じている点については、15年前と同じ結果が得られた。

表3 「恋人」と「異性友人」間の相関係数
豊田 弘司, 藤田 正 (2001)

尺度	男性	女性
愛情	0.31	0.08
好意	0.28	0.18

表4 「恋人」と「異性友人」間の相関係数

尺度	男性	女性
愛情	0.44	0.12
好意	0.56	0.6

考 察

性差について

本研究で性差が見いだされた結果をまとめる。現在のデータの恋愛尺度得点に対して分散分析を行った結果、女性の方が男性よりも友人と恋人の得点の差が大きい。3要因交互効果は有意ではなかったが、独占欲において恋人と友人の差が大きくあらわれており、この差は男性よりも女性で大きい傾向が見られた。女性は異性友人よりも恋人に対する独占欲が高い傾向にある、あるいは逆に言えば、男性は異性友人に対しても独占欲を感じる傾向にある。

この結果の注目すべき点は女性の方が独占欲が強いということである。独占欲の因子に当てはまる質問項目には“〇〇さんと一緒にいなければ、私はひどく寂しくなる。”“私は〇〇さんを幸せすることに責任を感じている。”“〇〇さんなしに過ごすことは、つらいことだ。”とあるが、これは男性ではなく女性がパートナーを選ぶからではないだろうか。つまり、子孫を残すことにおいて男性は「ばらまき戦略」がもっともシンプルで効率的であるが、女性は自分が産んだ子を生殖可能な年齢まで育てなければいけない。子育てに協力し、豊富な資源（金銭や社会的地位、直接的には食物や住居）を提供できる優秀な男性をパートナーとして共にいてもらわなければいけないからである。子を宿した途端にパートナーを見捨てるよう

な男性を選択することは、自分が産んだ子の将来に重大な影響を与えるだろう。また、産んだ子どもを一人で育てなければならぬとしたら、次の生殖機会のための時間を確保することが難しくなる。そのため、女性は必然的に恋人である男性に対しての独占欲が強くなるのではないだろうか。

Rubinの仮説の検討

男性に比べて女性の方が愛情と好意を区別するとされたRubinの仮説を検討する。

現在のデータにおいて、現在のデータにおいて「恋人」に対する愛情尺度では男性よりも女性の方が相関は低く見いだされた。これは豊田 弘司・藤田 正 (2001)と同様の結果であり、Rubin (1970)が両性の明確な専門分化仮説を支持するものと言えるだろう。

男性は草食化しているのか？

愛情と好意得点の間の相関は、現在も15年前のかわらず見いだされた。よって、男女の愛のあり方については、現在も変わらない面があると思われる。一方、15年前に比べて男性の愛情得点・好意得点は減少していた。また、恋人のいない男性の約半数近くは、今後も異性とつきあう可能性はないと感じていた。これは、男性が草食化している結果と見ることができよう。ではなぜ男性の草食化が進んだのだらうか。筆者は女性であるため、女性の視点からみた考察として女性の好みの傾向が変化した可能性を指摘しておきたい。女性の社会進出はめざましくその一方で、多くの若者は疲れきっている。女性も男性同様に癒されたいのである。いわゆる男らしいオラオラ系には魅力を感じなくなり、いわば女性の要求に応じた形で草食系といわれるような男性が増えたのではないだろうか。

引用文献

- 豊田 弘司・藤田 正 2001 大学生の愛情と好意における性差 奈良教育大学教育研究所 奈良教育大学教育研究所紀要 37, 31-35, 2001-03
中西 大輔 2003 好意感情と恋愛感情の混同：進化心理学的アプローチによる実験研究
金政 祐司・谷口 淳一・石盛 真徳 2001 恋愛イメージと好意理由に及ぼす異性関係と性別の

影響 対人社会心理学研究 1P.147-158P

松井 豊 1993a 恋愛行動の段階と恋愛意識 心
理学研究 64,335-342

松井 豊 1993b 恋こころの科学 サイエンス社

資料

①質問用紙の例

質問 1

これまであなたが最も好きになった人を思い浮かべ、その人の名前を質問文の〇〇にあてはめて、下記の質問に回答してください。なお、回答は次の1～7の数字を参考に「全くそう思わない」ときは1、「非常にそう思う」ときは7というように、1～7までの数値を○で囲んでください。

	全くそう 思わない	あまりそう 思わない	どちらかとい えばそう思 わない	どちらでも ない	どちらかとい えばそう思 う	ややそう 思う	非常にそう 思う
Q1 もし〇〇さんが元気がなさそうだったら、私は真先に励ましてあげたい。	1	2	3	4	5	6	7
Q2 私は〇〇さんと一緒にいる時、ほとんどいつも同じ気分になる。	1	2	3	4	5	6	7
Q3 〇〇さんはとても適応力のある人だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q4 〇〇さんのためなら、ほとんど何でもしてあげるつもりだ。	1	2	3	4	5	6	7
Q5 私は〇〇さんをととてもよくできた人だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q6 〇〇さんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる。	1	2	3	4	5	6	7
Q7 〇〇さんの判断の良さには全面的信頼をおいている。	1	2	3	4	5	6	7
Q8 〇〇さんのことならどんなことでも許せる。	1	2	3	4	5	6	7
Q9 私は〇〇さんを幸せにすることに責任を感じている。	1	2	3	4	5	6	7
Q10 〇〇さんと一緒にいると、相手の顔を見つめていることが多い。	1	2	3	4	5	6	7
Q11 私は〇〇さんのような人物になりたいと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q12 〇〇さんから信頼されると、とてもうれしく思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q13 〇〇さんが幸せになることが私の最大の関心である。	1	2	3	4	5	6	7

②質問用紙の例

質問 2

あなたが最も親しい異性の友人を一人思い浮かべ、その人の名前を質問文の〇〇にあてはめて下記の質問に回答してください。ただし質問1と同一人物はやめてください。なお、回答は次の1～7の数字を参考に「全くそう思わない」ときは1、「非常にそう思う」ときは7というように、1～7までの数値を○で囲んでください。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらかといえばそう思わない	どちらでもない	どちらかといえばそう思う	ややそう思う	非常にそう思う
Q14 〇〇さんは賞賛的になりやすい人物だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q15 〇〇さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる。	1	2	3	4	5	6	7
Q16 すべての事柄について、私は〇〇さんを信頼できるという気がする。	1	2	3	4	5	6	7
Q17 〇〇さんをひとり占めしたいと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q18 〇〇さんは責任ある仕事に推薦できる人物だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q19 私は一人でいると、いつも〇〇さんに会いたいと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q20 〇〇さんと知り合いになれば、すぐに〇〇さんを好きになると思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q21 クラスやグループで選挙があれば私は〇〇さんに投票するつもりだ。	1	2	3	4	5	6	7
Q22 〇〇さんと私はお互いにとてもよく似ていると思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q23 〇〇さんなしに過ごすことは、つらいことだ。	1	2	3	4	5	6	7
Q24 〇〇さんはみんなから尊敬されるような人物だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q25 〇〇さんはとても知的な人だと思う。	1	2	3	4	5	6	7
Q26 〇〇さんは私の知り合いの中で最も好きな人物だと思う。	1	2	3	4	5	6	7

③質問用紙の例

質問 3

Q.i あなたは現在恋人はいますか？

はい ・ いいえ

Q.i で「はい」と回答された方はそのまま回答を、「いいえ」と回答された方は次のページに進んでください。

Q.i で「はい」と答えた方のみ以下の質問に回答してください。

Q I あなたは人を好きになったことはありますか？

はい ・ いいえ

Q II 今後、現在の恋人とは別の人と付き合う可能性はありますか？

はい ・ いいえ

Q III 今後、現在の恋人とは別の人と付き合いたいと思いますか？

はい ・ いいえ

Q IV 今後、あなたは結婚する可能性はありますか？

はい ・ いいえ

Q V 今後、あなたは結婚したいと思いますか？

はい ・ いいえ

Q VI 自分にとってもっとも大切な友人と恋人との時間はどちらを優先しますか？

恋人 ・ 友人

Q VII 自分の誕生日をもっとも祝ってほしいのは誰ですか？

恋人 ・ 異性友人 ・ 同性友人 ・ 家族 ・ そのほか

Q VIII 年越し（カウントダウン）を一緒にむかえたいのは誰ですか？

恋人 ・ 異性友人 ・ 同性友人 ・ 家族 ・ そのほか

Q IX 旅行に一緒に行きたいのは誰ですか？

恋人 ・ 異性友人 ・ 同性友人 ・ 家族 ・ そのほか